〔和州巡覽記〕天の香山　ひきゝ山也、麓の村を膳夫村と云、吉備村より南に在、道は香山の東を行也、萬葉幷風土記に、うねび山、耳梨山、香山を大和の三山と云、國中には此三山の外に山なし、吉野の方より來れば、蘆原嶺より北に、三山一目に見ゆ、

〔大和名所圖會六〕天香久山　範兼卿類聚曰　此山あり所をしる人なし、澄月歌枕曰　此山のあり所ならひ傳ふる事ありとかや、披露におよぶべからず、釋日本紀曰　伊豫國風土記曰、天降の時二つにわかれて、片端は倭國にとゞまり、天香久山といへり、片端は伊豫國伊豫郡にとゞまり、天山といふ是なり、詞林採葉曰　凡此山は、本朝の靈山として、在所陰陽家に沙汰せらるゝ山也、〇中略

或書ニ、古老の曰、多武峯の東にあたりて高山あり、俗これを音羽山といふ、此山の半腹に音羽村あり、古來の天香久山は、此音羽山の事也、今の香久山は、ひきく小山にして、いにしへより續たる山の端もなし、天香來といひならはしたる高山の、いかなれば低くなるべきやうなし、何れの名所にても、むかし高山とよみしは、今も高く、むかし端山とよみしは、今も端山なり、是をおもへば、天香久山は、今の音羽山の事なるべしと云々、

〔古事記上〕故爾伊邪那岐命詔之、愛我那邇妹命乎、那邇二字以音、下效此、謂易子之一木乎、乃匍匐御枕方、匍匐御足方而哭時、於御淚所成神、坐香山之畝尾木本、名泣澤女神、

〔古事記傳五〕香山は、神名式に、大和ノ國十市郡天香山坐云々、書紀神武卷に、香山、此云介遇夜縻と、あり、遇を濁れること、是を始て古書皆同じ、〇中略　万葉に天降付天之芳來山とある此意なり、なほ此山をよめる歌は、万葉にも後世にもいと多し、山の南の麓に、今香山村と云もあり、土人は山をも村をも具を清て呼ぶなり、

〔日本書紀三神武〕戊午年九月甲子、有兄磯城、軍布滿於磐余邑、磯此云志、賊虜所據皆是要害之地、故道路絶塞、無處可通、天皇惡之、是夜自祈而寢、夢有天神、訓之曰、宜取天香山社中土、香山、此云介遇夜縻、以造天平瓮八十枚、平瓮、此云毗邏介、幷造嚴瓮、嚴瓮、此云怡途背、而敬祭天神地祇、

〔萬葉集一雜歌〕天皇〇舒明　登香具山望國之時御製歌

山常庭村山有等、取與呂布、天乃香具山、騰立國見乎爲者、國原波、煙立籠、海原波、加萬目立多都、怜何